# 興福寺中金堂院回廊の調査

法相宗大本山　興福寺
奈良国立文化財研究所　平城宮跡発掘調査部

## 1. はじめに

興福寺では『興福寺境内整備構想』（1997 年）にもとづき、境内の主要伽藍（中金堂、中門、回廊、南大門）、およびその周辺地区を対象とした遺構の整備をすすめることになりました。その一環として、昨年度の中門跡に引き続き、今年度はおもに中金堂院回廊の東北隅部分と中金堂前庭部の発掘調査をおこなっています。調査区の面積は 1485 ㎡で、調査は 10 月 4 日に始めて現在継続中です。これまでの薬師寺をはじめとする南都七大寺の発掘調査では、伽藍内の各建築についてはおこなわれているものの、中心堂塔の前庭部分における本格的な調査は今回がはじめてです。

## 2. 中金堂院の歴史と回廊の建築

興福寺は、天智８年（669）中臣鎌足の妻であった鏡女王が、鎌足のつくった釈迦三尊像を安置するために山階寺（京都市）を建立したことにはじまります。藤原京への遷都にともなって、この寺も飛鳥の地に移り、厩坂寺となりました。さらに平城京への遷都により、京の東北部である左京三条七坊の地に移建されて興福寺となるのです。

中金堂と中門をむすぶ回廊で囲われた区画を中金堂院とよびます。中金堂院の建立年代は記録にありませんが、平城京遷都後まもない時期に、他の堂塔にさきがけて建てられたとする説が有力となっています。平安時代以後は、この中金堂院に限ってみても永承元年（1046）の火災をはじめとして７度もの火災に遭います。とくに有名なのは平安時代末期、治承４年（1180）の平重衡による南都焼き討ちです。火災のたびに興福寺は再建を重ねてきましたが、江戸時代の享保２年（1717）におきた７度目の火災の後は、南円堂が寛保元年（1741）に復興されるものの、中金堂がかろうじて文政２年（1819）に建てられただけで、回廊や中門はついに再建されませんでした。

中門からのびて中金堂にとりつく回廊は、梁行が２間で、中央の柱筋に連子窓をいれる複廊という形式です。奈良時代の大きな寺院ではよく使われた形式ですが、いずれも現存しません。現在みることができる同じ形式の回廊は、春日大社本殿の回廊（南北朝時代）のほか、発掘調査の成果から最近薬師寺で再建された回廊があります。

## 3. 発掘調査の成果

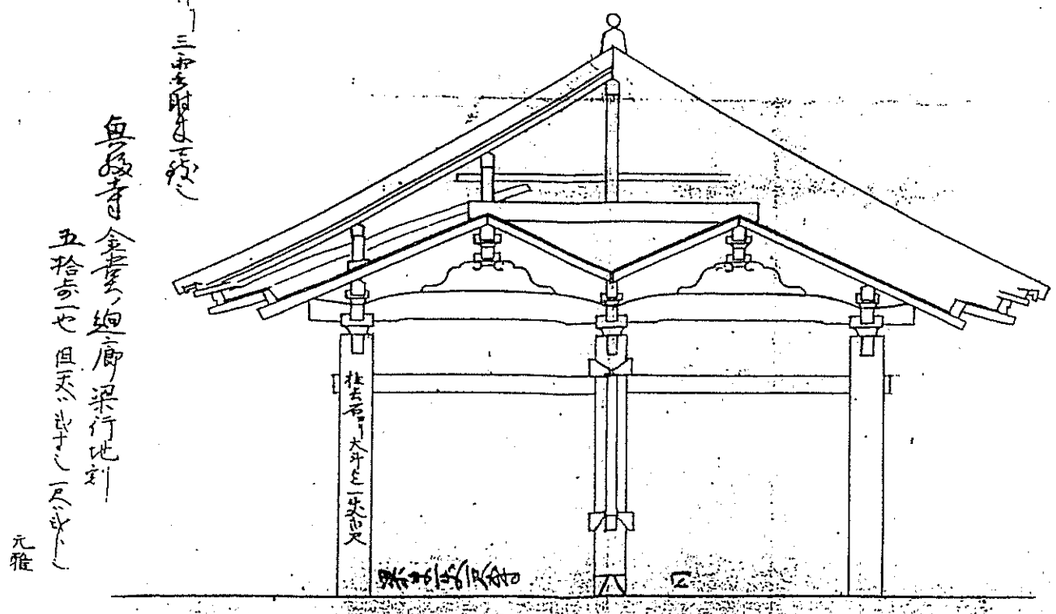
①回廊　回廊の礎石は発掘調査前から地上に露出していて、あるていど柱間寸法（柱と柱の間隔）を推定できました。調査を進めると、礎石の残っていないところでも、ほぼ予想通りの位置に礎石を据えるときに掘った穴（据付穴）や礎石を抜き取るときに掘った穴（抜取穴）を発見しました。その結果、回廊の柱間は、中金堂にとりつく北面回廊が桁行 14 尺（4.16 m）・梁行 12 尺（3.55 m）、回廊の隅部分２間四方がすべて 12 尺（3.55 m）、東面回廊が桁行 12.7 尺（3.77 m）・梁行 12 尺（3.55 m）です。



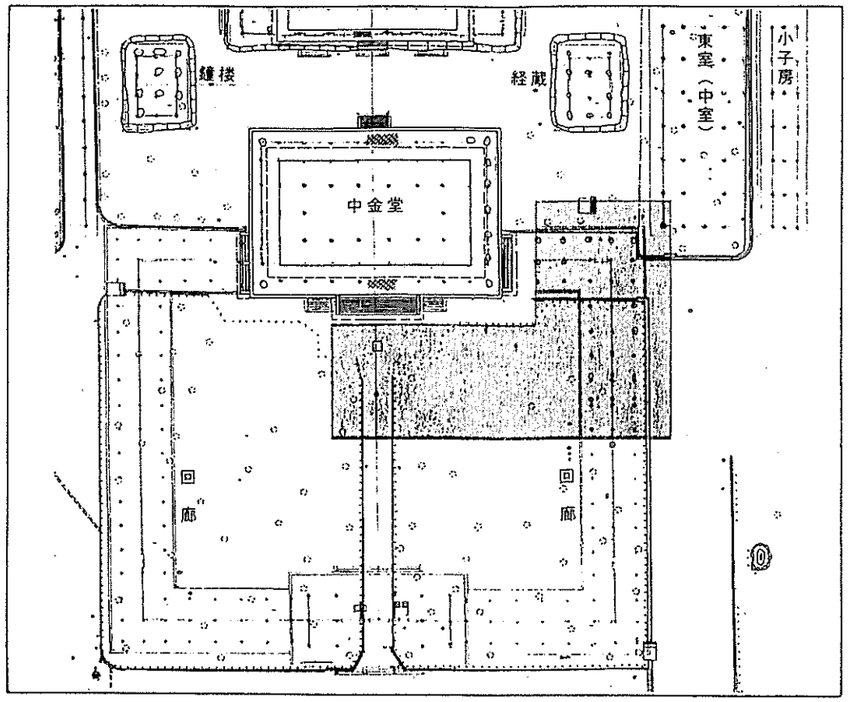
回廊中央の柱筋には、凝灰岩製の地覆石が２列にならんでいる部分があります。ここは連子窓が入る柱筋で、連子窓の下は壁になるのですが、この石には壁を受ける横材（地覆）と、その両側からうちつけた長押をものせていたと考えられます。そこで本来ならば幅の広い石をおくべきところを、幅の狭い２列の石でまかなったのでしょう。

回廊の基壇は、中金堂にとりつく北面回廊部分では、自然の地盤（地山）を削ってつくっていますが、造営前の地形が谷筋となる東面回廊部分では、整地をした上に基壇の土をつんでいるようです。基壇の縁には花崗岩製の地覆石が一部に残り、さらにその外側には雨落溝を発見しました。ところが、残りのよい東面回廊の西側と北面回廊の北側を比べると、どちらも溝自体は人頭大の玉石をならべてつくっている点では同じなのですが、東面回廊の西側では雨落溝の外側にも玉石を何列か敷きならべていて、北面回廊の北側では溝の外側には玉石を敷かないという違いがあります。これはやはり回廊の内側を立派につくったためなのでしょう。また、礎石と雨落溝との距離から、回廊の軒の出は約７尺（2.1 m）だったことがわかります。基壇上にはこのほか回廊を建てるときに組んだ足場の柱穴や、地鎮の際に土器２枚を埋めた小穴も発見しました。

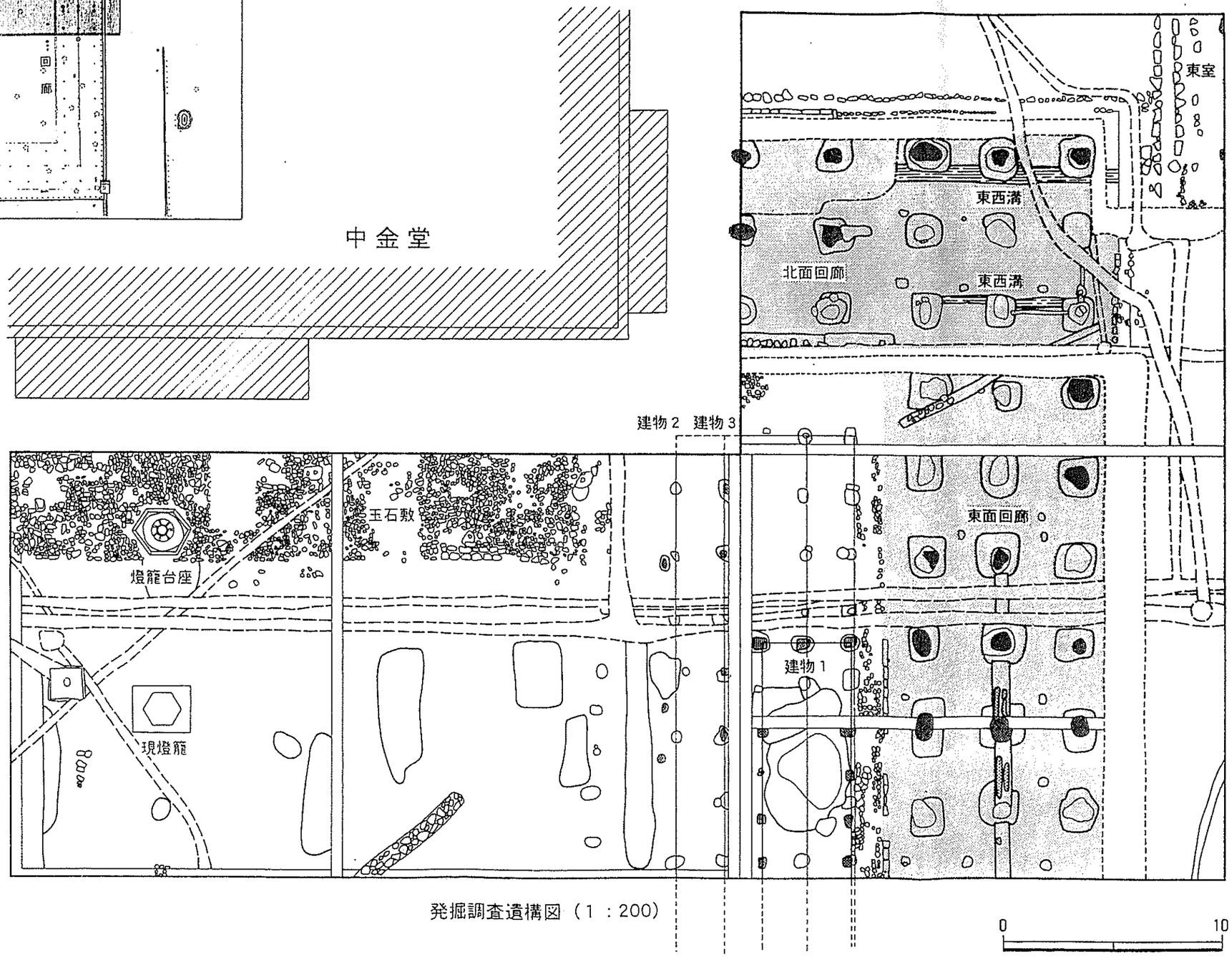
これらの遺構の年代は、回廊礎石や基壇土に関しては部分的な改修があるもののほぼ興福寺創建当初と思われます。一方、回廊基壇の地覆石や雨落溝・玉石敷きについては、玉石雨落溝の据付溝に焼土を含むため、永承元年（1046）火災後の再建時につくられたのではないかと考えています。また、創建当初の基壇外装は遺構として確認できませんが、発見した花崗岩地覆石の据付溝には凝灰岩片を含むことから、凝灰岩でつくられた壇正積基壇だったのではないかと推定しています。



興福寺回廊梁行断面図（東京国立博物館蔵「興福寺建築諸図」、享保焼失前）




調査位置図（1：1000）




発掘調査遺構図（1：200）

②中金堂院前庭部　回廊で囲われた中金堂の前庭部分は、通常、燈籠だけが立つ空間です。ところが、今回、回廊に近い部分で南北に細長い建物を何棟か発見しました。建物１は桁行５間以上×梁行２間の礎石建物で、礎石の高さからみても、もっとも新しい時期のものものでしょう。建物２は桁行７間以上×梁行４間（東西２面庇）の礎石建物で、鎌倉時代ころ。建物３は建物２と柱位置をまったく同じにする掘立柱建物で、建物２より古い時代のものです。これらはどのような性格の建物なのでしょうか。

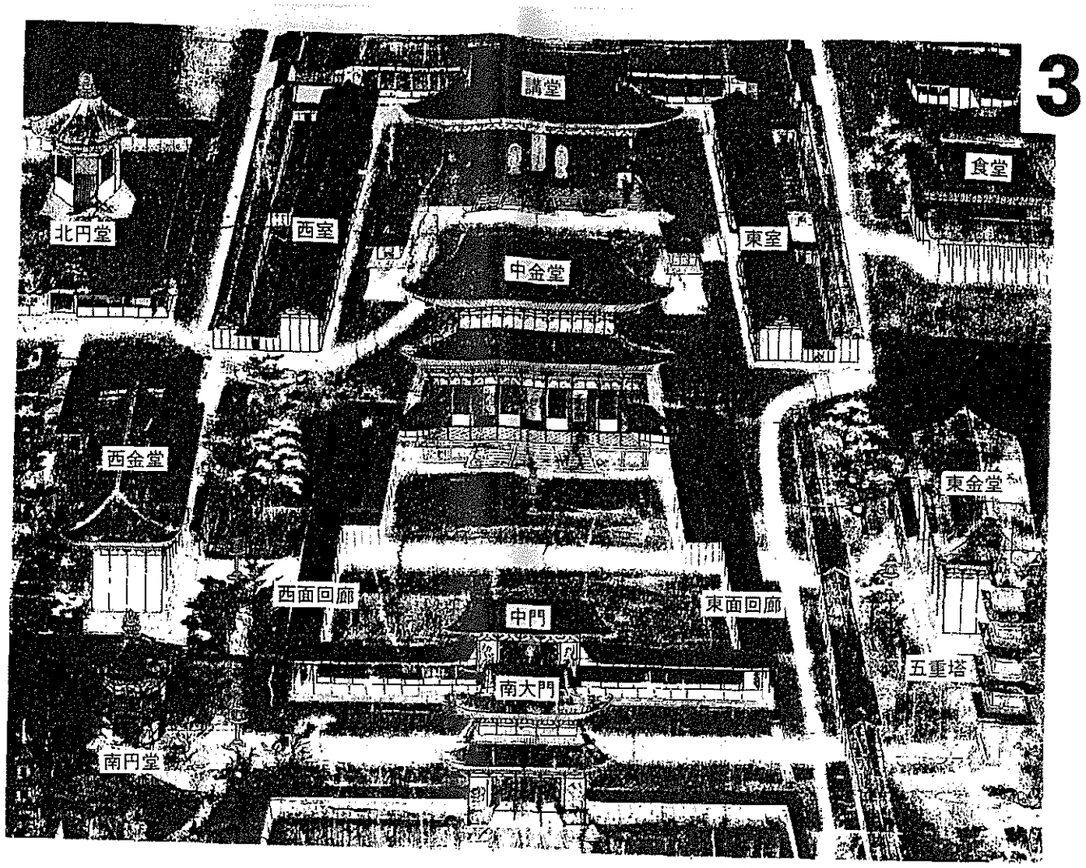
ここで「春日社寺曼荼羅」（鎌倉～室町時代）という絵図を見てみます。すると、ちょうどこの位置に南北に細長い建物が描かれているのがわかります。今回発見した建物２や建物３の梁行規模は絵図中の建物と一致します。この絵図自体はどんな場面を描いたのかわからないのですが、永承元年（1046）の火災後、復興する際の記録（『造興福寺記』）をみると、事始（ことはじめ）（仕事始め）の儀式の際、東西回廊から20丈（約６m）はなれた前庭部分に、南北に細長い仮設の建物を建てて、僧侶や造営関係の役人が座る場所にしています。さらに、享保２年（1717）の火災後におこなわれた伽藍復興をめざした儀式の際も、同じような建物を建てていますので、今回発見したこれらの建物も、記録に見えるような儀式の際に建てた仮設建物の可能性があります。建物１～３のほかにも筋のそろう礎石や柱穴が点々とありますので、火災による復興の際には、おそらく毎回同じような建物をたてて儀式をしていたのでしょう。

中金堂の南には玉石を敷き詰めた舗装があります。南側には見切りとなる石をおいていますので、南側にはこれ以上広がりません。東側には攪乱があって、東西はどこまで続いていたかわかりませんが、現状では中金堂基壇の前だけにみられます。これがつくられた年代について、玉石を多用する回廊雨落溝の工作と同じ時期とみなせば、永承元年（1046）焼失後の再建にともなうものと考えられますが、部分的な土層観察では創建当初までさかのぼる可能性もでてきており、この点の解明は今後の調査における課題のひとつです。

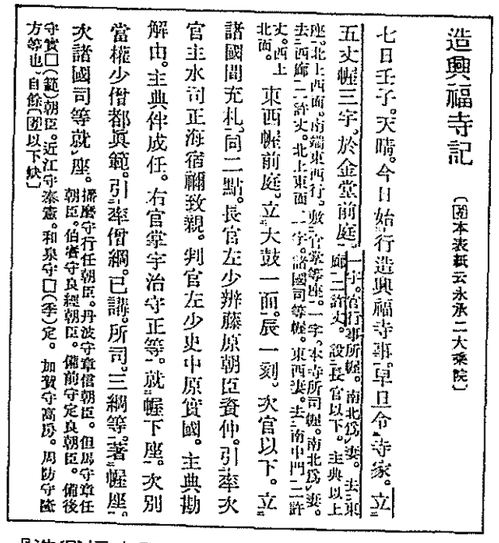
中門と中金堂の中心を結ぶ軸線上には燈籠の台座となる石があります。中央には直径36 cm、深さ 50 cmほどの円形の穴を穿っており、燈籠の竿をこの穴にさすのでしょう。この台座石のまわりには地覆石状の凝灰岩を六角形にならべています。用途についてはよくわかりませんが、台座を固定させるための施設か、燈籠と形を合わせた見切りの石でしょうか。この燈籠台座石は玉石敷きを一部抜いたあとに据えていますので、玉石敷きが施された時期よりも新しいようです。

③東室（中室）　発掘区の東北隅、調査区の壁ぎわに東室の礎石を２つ発見しました。礎石間の距離は約18尺（5.4 m）ですから、柱間２間ぶんに相当するものと考えられます。また、その西側には東室の西雨落溝があります。やや大ぶりの石を溝の側石として据えているのですが、後世の攪乱のため残っていない部分もあります。この周囲には凝灰岩が散乱しており、創建当初は東室の基壇外装も凝灰岩製だったと考えられます。なお、雨落溝の西側に接して大きな石をならべた深くて立派な溝があります。当初、東室の雨落溝と考えましたが、礎石からの軒の出が大きすぎ、また土層の観察でもかなり上面から切り込んで石を据えていることがわかるので、東室とは直接関係のない溝なのかもしれません。

④２条の東西溝　回廊の東北隅部分に回廊の礎石据付穴よりも古い、平行する２条の東西溝を発見しました。溝と溝の心心距離は約5.9 mです。北側の溝は幅が約60～80 cm、深さも現在の面から約30 cmほどあります。この溝は中金堂に近い西の方では、回廊基壇上の下に隠れてしまって見えません。一方、南側の溝は幅が約25～40 cmほどでごく浅く、東と西では地面が削られてしまっているため溝はまったく残っていません。




「春日社寺曼荼羅」（部分）

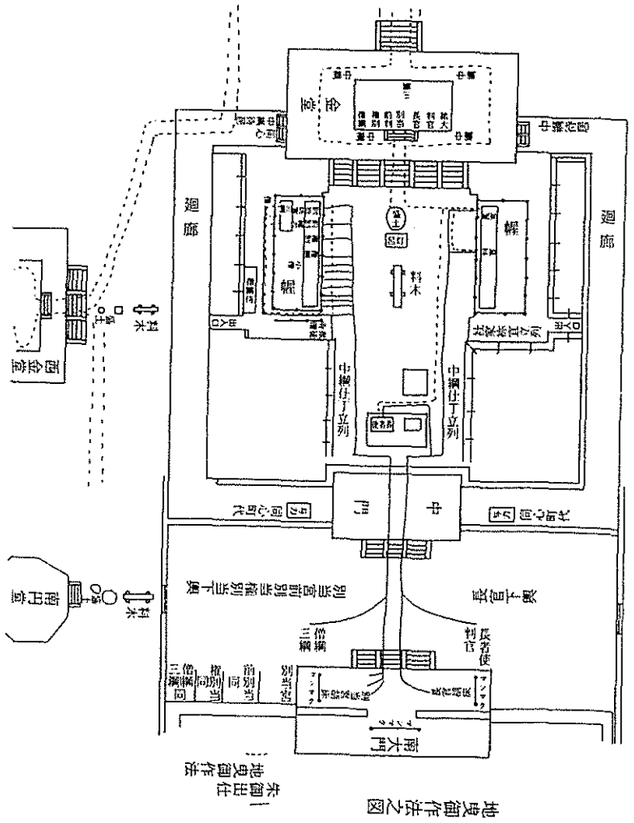


造興福寺記

（園本表紙云永承二大乗院）

七日壬子。天晴。今日始行造興福寺事。早旦令寺家。立五丈幄三宇。於金堂前庭。廻二行。宿所幄。南北為妻。去東西座。北上西面。南端東西行。敷二合筵等座。一宇。本寺所司幄。南北為妻。去西廊二許丈。北上東面。二宇。諸國司等幄。東西妻。去南中門二許丈。西上北面。東西幄前庭。立大鼓一面。辰一刻。次官以下。立諸國間充札。同二點。長官左少弁藤原朝臣資仲。引率次官主水司正海宿禰致親。判官左少史中原貨國。主典勘解由。主典伴成任。右官掌宇治守正等。就幄下座。次別當権少僧都真範。引率僧綱。已講所司。三綱等。著幄座。次諸國司等就座。播磨守行任朝臣。丹波守章信朝臣。但馬守章任朝臣。伯耆守良綱朝臣。備前守定良朝臣。備後守貫□（範）朝臣。近江守泰憲。和泉守□（季）定。加賀守高房。周防守藤方等也。自餘（以下欠）

『造興福寺記』における仮設建物の記事




「興福寺伽藍地曳之図」

（『興福寺伽藍再建事始地曳并法会之記』、享保14年）

## 4. 出土遺物

出土した遺物の大半は瓦です。中金堂前庭部東方の石敷きがとぎれるあたりには、享保２年（1717）火災後の瓦溜り状の整地層があって、中世の瓦のほか、風鐸の破片なども出土しました。そのなかでも注目すべきものは金箔つきの軒丸瓦で、２点出土していますが、そのうち１点は破片です。ここで紹介する金箔軒丸瓦の寸法は、全体の直径が 15 cm、文様のある内側の直径 11.2 cmで、模様のないまわりの部分 1.8 ～ 2 cm、まわりと内側の高さの差が 0.8 cm、側面の厚さ 2.6 cmとなっており、向って右上の外縁部約 1/3 が欠けているものの、文様部分はほぼ完形です。このうしろに続く丸瓦部分は脱落していますが、平坦な裏側のやや内側に接合していることがわかります。表面は黒色で焼きかたはやや甘く、原料の土は白色の小石が混じるやや明るい灰色です。文様のある面（瓦当面）に金箔を黒漆で接合していて、金箔はまわりの部分だけでなく文様の凹凸部も含めて全面に貼っています。文様は五七桐紋といって、豊臣家のものです。出土地点からみて、貞和３年(1347)に再建され享保２年（1717）に焼失した金堂か、同じ頃に建てられた回廊の軒先に使用されていた可能性があります。

ところで、金箔を貼った瓦の出土例をみると、北は宮城県、南は宮崎県までの 51 箇所があげられ、用いられた時期も織田信長や豊臣秀吉・秀頼の時代である天正～慶長年間（1570 ～ 1615 年）に限られるようです。また、城郭や諸侯の屋敷で使われる例が圧倒的に多く、城郭以外では天正 14 年（1586）に建てられた厳島神社千畳閣の「王」紋軒丸瓦が年代的にはもっとも古く、秀吉建立の言い伝えがある興隆寺跡（長岡京市）の巴紋軒丸瓦が寺院から出土した唯一の例でした。秀吉の弟・秀長の居城であった郡山城（天正 14 年＝ 1586）では、金箔瓦の出土は知られておりませんので、この金箔瓦は大和国から出土した初めての例であって、さらに寺院から出土した第２例目ということになります。

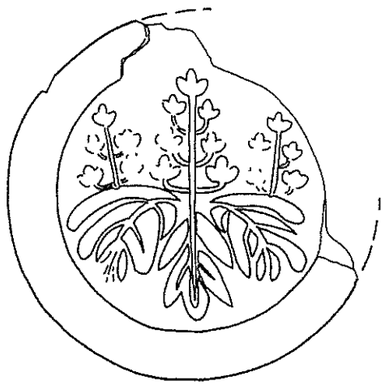
天正 13 年（1585）７月 11 日に豊臣秀吉は関白となり、姓を羽柴から藤原に改めますが、このときに桐の文様を天皇から賜っていますので、これ以降につくられた瓦であることは確実です。また、瓦の製作年代を考えるうえで重要な、同じ型からつくられた文様が全国的にも知られていないため、今回出土した金箔軒丸瓦のつくられた年代はわからないのです。興福寺－豊臣家－金箔瓦のラインについてももうひとつはっきりしません。最後の年表にあるとおり、興福寺では天正 11 年（1583）には大風によって築地が倒れるなどの被害を受けており、天正 16 ～ 17 年にかけて修復されます。一方、天正 14 年には秀吉が興福寺金堂に参拝していますので、今回出土した金箔瓦をこの時期のものとすれば話は合うのですが、それにはこの金箔瓦自体の分析・研究をもう少し待たなければならないでしょう。

### 金箔瓦出土地一覧

| | 遺跡名 | 遺跡種別 | 所在地 | 軒丸瓦 | 軒平瓦 | その他 | 年代 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 南小泉遺跡 | 館 | 宮城県仙台市 | 巴（本瓦葺？） | | | 慶長? | 館　若林城下町 |
| 2 | 元袋遺跡 | 屋敷 | 宮城県仙台市 | 巴 | | | | 伊達家御仮屋跡か |
| 3 | 養種園遺跡 | 屋敷 | 宮城県仙台市 | 菊花紋 | | | | 伊達家別荘小泉屋敷か　若林城下 |
| 4 | 仙台城跡 | 城郭 | 宮城県仙台市 | | 桔梗 | 菊丸 | 慶長6～ | 瓦付着鬼(桐、菊)　鯱、軒瓦あり　伊達 |
| 5 | 福島城跡 | 城郭 | 新潟県上越市 | | | | | 詳細不明 |
| 6 | 若松城跡 | 城郭 | 福島県会津若松市 | | | 鬼(五七桐) | 文禄元～ | 採集品　桐、菊紋軒平　蒲生氏郷 |
| 7 | 沼田城跡 | 城郭 | 群馬県沼田市 | | | 鬼? | 天正18～ | 真田信幸 |
| 8 | 旧薩摩藩江戸屋敷 | 屋敷 | 東京都港区 | 五七桐 | | | | |
| 9 | 佐伯藩上屋敷跡 | 屋敷 | 東京都千代田区 | | | 鬼? | | 毛利高政 |
| 10 | 金沢藩下屋敷跡 | 屋敷 | 東京都文京区 | 梅鉢 | 唐草、梅鉢 | 鬼、鯱、菊丸、熨斗 | 元和?～ | 五七桐軒丸あり |
| 11 | 甲府城跡 | 城郭 | 山梨県甲府市 | | | 鬼(五三桐)、鯱、飾り | 天正18～ | (豊臣秀勝) |
| 12 | 上田城跡 | 城郭 | 長野県上田市 | | | 鬼、鯱、鳥衾（巴） | 天正18?～ | 五七桐紋鬼瓦　真田昌幸 |
| 13 | 松本城跡 | 城郭 | 長野県松本市 | | | 飾り | 天正18～ | 五七桐軒丸　石川数正 |
| 14 | 小諸城跡 | 城郭 | 長野県小諸市 | 五三桐 | 唐草 | | 天正18～ | 仙石秀久 |
| 15 | 岐阜城跡 | 城郭 | 岐阜県岐阜市 | 巴 | | 鯱 | 天正9～ | 織田信忠 |
| 16 | 金沢城下 | 屋敷 | 石川県金沢市 | | | | | 中村博司氏ご教示 |
| 17 | 駿府城跡 | 城郭 | 静岡県静岡市 | 巴 | | | 天正18～ | 中村一氏、徳川家康 |
| 18 | 名古屋城跡 | 城郭 | 愛知県名古屋市 | 巴 | | | | 徳川義直　清洲城移築 |
| 19 | 名古屋城御藏屋跡 | | 愛知県名古屋市 | | | 鬼(丸に三葉葵) | 寛永2～ | |
| 20 | 清須城跡 | 城郭 | 愛知県清洲町 | 巴 | 唐草 | 飾り | 天正(14.)18～ | (織田信雄)、豊臣秀次 |
| 21 | 松ヶ島城跡 | 城郭 | 三重県松阪市 | | | | 天正8～13 | 織田信雄 |
| 22 | 松阪城跡 | 城郭 | 三重県松阪市 | | ○? | | 天正13～ | 蒲生氏郷、松ヶ島城より移築か |
| 23 | 神戸城跡 | 城郭 | 三重県鈴鹿市 | ? | | 飾り? | 天正8～ | 織田信孝 |
| 24 | 安土城跡 | 城郭 | 滋賀県安土町 | 巴 | 唐草 | 鬼、鯱、飾り他 | 天正4～10 | 織田信長 |
| 25 | 八幡山城跡 | 城郭 | 滋賀県近江八幡市 | | | 飾り（桐） | 天正13～文禄4 | 豊臣秀次 |
| 26 | 彦根城跡 | 城郭 | 滋賀県彦根市 | 巴 | | 鬼、鯱 | 慶長14?～ | 井伊直勝、大津城より移築か |
| 27 | 金ヶ森遺跡 | 不明 | 滋賀県守山市 | 菊花紋 | | 飾り | | |
| 28 | 観音堂遺跡 | 不明(寺?) | 滋賀県草津市 | | | 鬼 | | |
| 29 | 古屋敷遺跡 | 不明 | 滋賀県大津市 | 菊花紋 | | | | |
| 30 | 大津城跡 | 城郭 | 滋賀県大津市 | 五七桐 | | 鬼、飾り | 天正11～ | 豊臣秀吉 |
| 31 | 聚楽第跡と周辺屋敷跡 | 屋敷 | 京都府京都市 | 巴、梅花紋 | 唐草 | 鬼、鯱、飾り(桐)、熨斗、挽込 | 天正13～文禄4 | 豊臣秀吉 |
| 32 | 伏見城跡と周辺屋敷跡 | 城郭、屋敷 | 京都府京都市 | 巴、花紋(、桐) | 唐草 | 鬼、鯱、飾り他 | 文禄2～慶長 | 桐は橋本関雪記念館蔵、豊臣秀吉 |
| 33 | 豊国神社跡 | 寺社 | 京都府京都市 | 五七桐 | | | | 妙法院蔵品は関連品か（中村氏ご教示） |
| 34 | 上賀茂神社 | 寺社 | 京都府京都市 | | | | | 中村氏ご教示 |
| 35 | 北野天満宮 | 寺社 | 京都府京都市 | 梅鉢紋 | | | | |
| 36 | 離宮八幡宮 | 寺社 | 京都府大山崎町 | 巴 | 唐草 | 鬼、鳥衾、面戸 | | |
| 37 | 興隆寺跡 | 寺社 | 京都府長岡京市 | 巴 | | | | |
| 38 | 興福寺 | 寺社 | 奈良県奈良市 | 五七桐 | | | | |
| 39 | 大坂城跡と周辺屋敷跡 | 城郭、屋敷 | 大阪府大阪市 | 五七・五三桐、巴 | 唐草 | 鬼、鯱、飾り(菊紋等)他 | 天正11～慶長20 | |
| 40 | 堺環濠都市跡 | 屋敷 | 大阪府堺市 | 巴 | | | 慶長? | 千利休屋敷隣接 |
| 41 | 岡山城跡 | 城郭 | 岡山県岡山市 | 五七桐、巴 | | 鬼、飾り、鳥衾(巴) | 天正18～ | 桐は伝世品　宇喜多秀家 |
| 42 | 厳島神社千畳閣 | 寺社 | 広島県宮島町 | 「王」紋 | | | 天正15 | 豊臣秀吉寄進 |
| 43 | 広島城跡 | 城郭 | 広島県広島市 | | | 飾り（桐？） | 天正17?～ | 毛利輝元 |
| 44 | 江美城 | 城郭 | 鳥取県江府町 | | | 鯱 | | |
| 45 | 小倉城跡 | 城郭 | 福岡県北九州市 | | | 鬼 | 天正15～ | 桐紋軒平瓦あり　毛利勝信 |
| 46 | 永照寺跡 | 寺社 | 福岡県北九州市 | | | 鬼 | | 中村氏ご教示 |
| 47 | 名護屋城跡 | 城郭 | 佐賀県鎮西町 | | | 鬼、鯱、飾り（五七桐）、鳥衾 | 天正18～慶長3 | 豊臣秀吉 |
| 48 | 日野江城跡 | 城郭 | 長崎県北有馬町 | | | 鳥衾(巴) | | 有馬晴信 |
| 49 | 熊本城跡 | 城郭 | 熊本県熊本市 | | 桔梗唐草 | | 天正16～ | 拓本のみ　加藤清正 |
| 50 | 豊国神社跡 | 寺社 | 熊本県熊本市 | 巴 | | | | 裏採　加藤清正 |
| 51 | 佐土原城跡 | 城郭 | 宮崎県佐土原町 | | | | 天正 | 島津 |

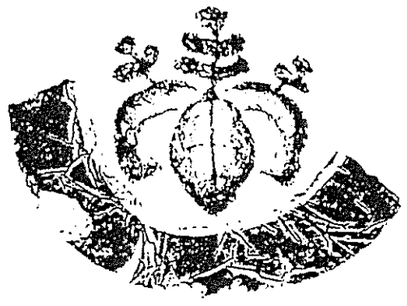
桐紋は花の数を示す。


参考文献
中村博司1978「金箔瓦試論」『大坂城天守閣紀要』6　大坂城天守閣 pp. 16-26
中村1980「金箔瓦試論－補遺」『大坂城天守閣紀要』8　大坂城天守閣 pp. 14-22
中村1995「金箔瓦論考」『織豊城郭』第２号 織豊城郭研究会 pp. 99-130
倉澤正幸1994「信濃における織豊期の城郭所用瓦の考察－上田城跡他出土軒瓦・金箔瓦の検討－」『信濃』第46巻第９号 pp. 29-45
田代孝1992『開館10周年記念特別展 天下人の時代』山梨県立考古博物館

本調査で出土した金箔瓦
（写真トレースによる略図）

岡山城天守付近の金箔瓦



広島城二の丸出土の軒丸瓦

縮尺はいずれも実物の約40%
岡山城・広島城の瓦は上記参考文献、『中村 1995』より転載

## 5. まとめと課題

①回廊は創建規模を踏襲　興福寺中金堂院回廊の礎石は、一部据え直しがあるものの創建当初から使われてきた可能性が高いことがわかりました。これまでの研究でも、興福寺における焼失後の復興にあたっては、ほぼ創建当初の規模を踏襲して堂塔を再建してきたことが指摘されており、今回の調査でもこのことが確認できたことになります。

②前庭部分で儀式用の仮設建物を発見　中金堂前庭部分で火災後の再建工事にともなう儀式用の仮設建物を発見しました。文献や絵画資料から、儀式用の建物が存在することは推定できたものの、それを確認できたのは南都の大寺院でははじめてのことです。

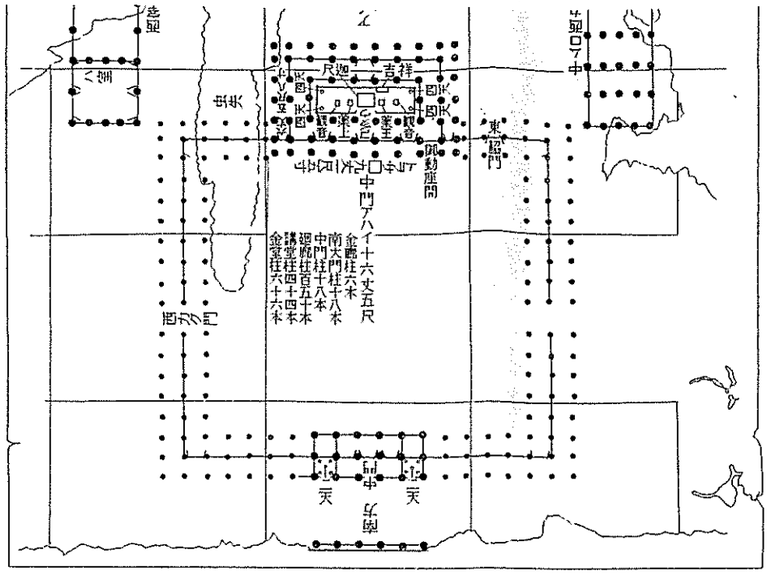
③中金堂の前に石敷きを発見　中金堂の南に石敷きの舗装を発見しました。参道部分ならばともかく、中金堂前だけを石敷きとする例はめずらしく、前庭部分の使用方法や空間構成などについて、課題となるべき新たな資料を提供したといえます。

④回廊にひらく門と柱間寸法の問題　中金堂院の回廊には、中門のほかに東西南北の各面に門が２つずつ開くことが記録（『興福寺流記』）によってわかっています。門といっても連子窓部分を扉とした通用門ていどの簡単なものなのでしょうが、今回の調査ではその跡を発見することができませんでした。門は必要な施設ですから、おそらく遺構に残らないような門の構造だったと考えられます。また、今回の調査によって回廊の柱間寸法が判明したのですが、この柱間で東面回廊が続いていたと考えると、昨年発掘した中門の柱筋とそろわないばかりか、記録に出てくる東面回廊の全長とも合わなくなってしまいます。

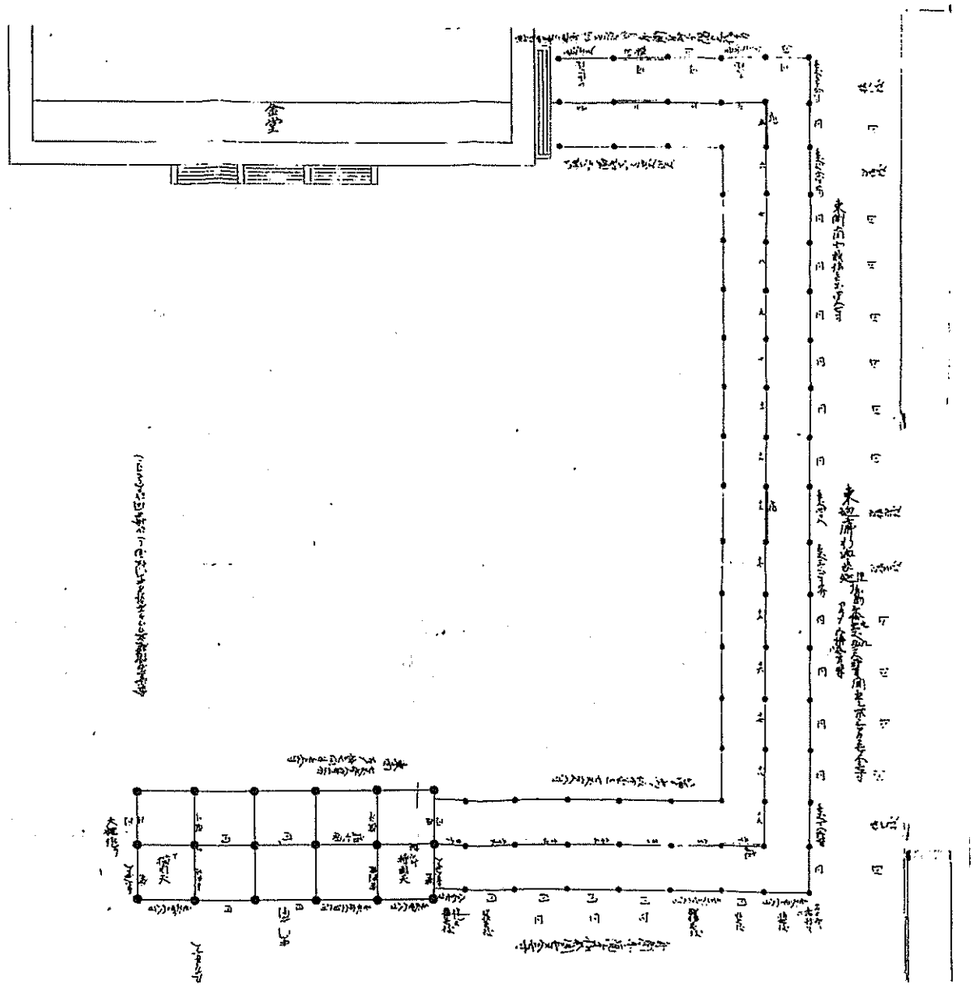
ここで 15 世紀と 17 世紀頃に描かれた２枚の図面をみてみましょう。享保２年（1717）に焼けた回廊は嘉暦２年（1327）の焼失後に再建された回廊ですから、この２つの図面は同じ時に再建された回廊を描いたものです。ですから当然ですが、発掘調査からはわからなかった門の位置など図面ではよく一致しており、ここから門の位置は判明します。また 17 世紀頃の図面には、柱間寸法の書き込みがありまして、東面回廊ではまん中の門を境にそれより北側と南側とでは違う数値が書かれています。しかし、その全長は創建当初の記録とほぼ一致しますし、さらに回廊北側の寸法は今回の発掘調査結果ともよく合うのです。今回の調査によって回廊の柱位置はほぼ創建当初と考えられるわけですから、この 17 世紀頃の図面も創建当初の柱間や門の位置を反映していると考えられ、中金堂院の回廊は、北面と南面で柱間寸法が違うどころか、東面・西面に関してもまん中付近の門を境にその北と南で柱間寸法が違うという特異な構造だったことがわかります。どうしてこのような柱配置になったかは、今後の課題です。

⑤興福寺の創建年代の問題　歴史のところで触れたように、興福寺の創建時期はあきらかではありません。興福寺造営に関する最初の文献は、「はじめて養民、造器、造興福寺仏殿司を置く」という『続日本紀』養老４年（720）10 月 17 日条です。造興福寺仏殿司というのは国家機関ですから、藤原氏の個人的な寺院を、これ以後は国家機関が造営することにしたのです。ところが、この年の８月３日には平城京遷都を主導した藤原不比等（ふひと）が亡くなっており、翌年には不比等のために北円堂が建てられました。このことから、この造興福寺仏殿司を北円堂建立のためにおかれた機関と考え、興福寺自体、つまりもっとも重要な中金堂院は不比等存命中にほぼできていたのだろうという考え方が一般的でした。

これに対して、興福寺から出土する瓦には奈良時代初頭のものがないことから、『続日本紀』にみえる造興福寺仏殿司設置を興福寺造営の端緒と考える瓦研究者もいました。今回の発掘調査で発見した興福寺回廊よりも古い平行する２条の東西溝は、この問題に手が



「中金堂院図」
（『肝要絵図類聚鈔』）



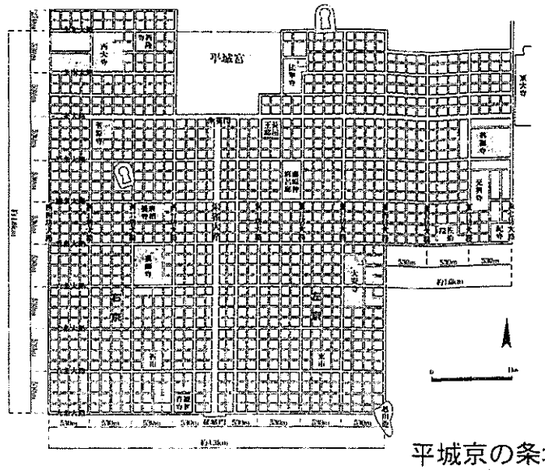
興福寺回廊平面図（東京国立博物館蔵「興福寺建築諸図」、享保焼失前力）

かりを与えてくれるものとなったのです。

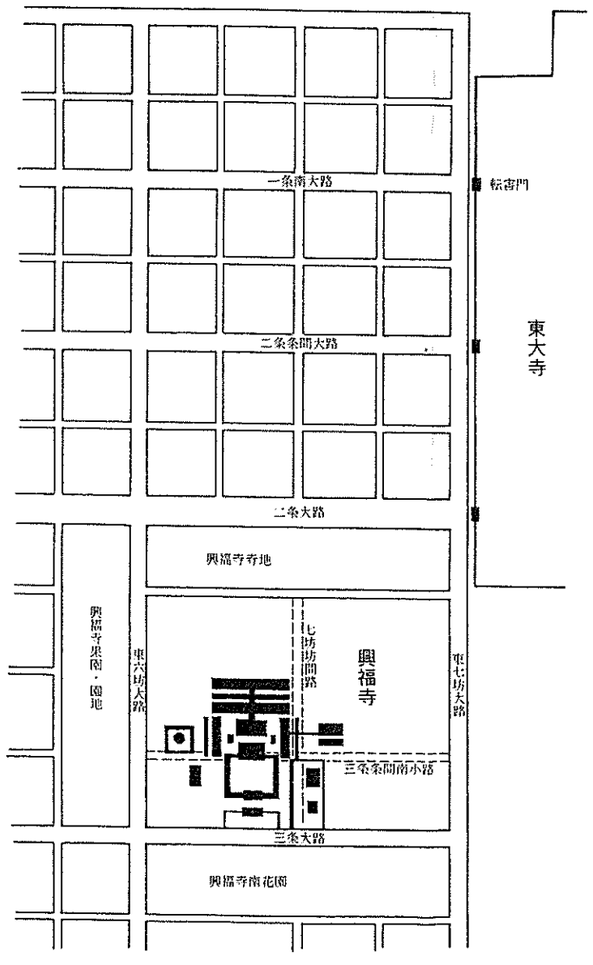
まずこの溝の位置に注目します。平城京は条坊制という方法によって大小の道路をつくり、碁盤目状に整然と区画割りしています。道路の両側には側溝を掘って雨水ほか生活用水を排水していました。現存する東大寺転害門は、奈良時代の門として有名ですが、平城京の一条南大路という東西道路のつきあたりに位置しています。この東大寺転害門からの距離を調べると、この溝は平城京の三条条間南小路という道路の両側にある側溝だということがわかりました。

つぎに、この２条の溝間の距離（5.9 m）に注目します。和銅６年（713）２月に度量衡の改正があり、それまでは大宝律令の規定により、土地測量には大尺という単位を、それ以外の建物などには小尺（5/6 大尺にあたります）という単位を用いていたのを、これ以後は何を測るにもすべて小尺を使うよう一本化しました。今回発見した溝間の距離 5.9 mは 20 小尺という長さにあたり、小尺を用いていますので、この平城京三条条間南小路がつくられたのは、和銅６年以降の可能性が大きいといえます。回廊の礎石据付穴はこの溝よりも新しいのですから、すくなくとも興福寺回廊の創建年代は和銅６年以降ということになってしまいます。

奈良時代はじめの平城京の大寺に、興福寺のほか元興寺、大安寺、薬師寺がありますが、いずれも平城京遷都よりやや遅れて霊亀～養老年間（714～ 721）に飛鳥の地から移されています。ですから、年代だけを考えれば平城京における興福寺の創建が『続日本紀』の養老４年(720)でもよいように思えますが、すると藤原不比等は興福寺伽藍の造営にどれだけかかわることができたのかが問題になってしまいます。ですから、今回発見したこの小さな２条の溝がもつ意味は、限りなく大きいといえるのではないでしょうか。




平城京の条坊




平城京と興福寺

## 興福寺略年表

| 年 | 事　　項 |
|---|---|
| 和銅　３年(710) | ３月、平城京遷都 |
| 和銅　６年(713) | ２月 19 日、度量の制をあらため、測地に大尺ではなく小尺を用いることとする |
| 養老　４年(720) | ８月　３日、藤原不比等が没する<br>10 月　17 日、造興福寺仏殿司を設ける |
| 元慶　２年(878) | ４月　８日、堂宇僧房が焼ける |
| 永承　１年(1046) | 12 月　24 日、西里の民家の火事が類焼、中金堂・回廊をはじめ伽藍のほとんどが焼失。すぐさま再建事業はじまる。回廊造営は摂津・甲斐・越中・若狭など６カ国に宛てられる |
| 永承　３年(1048) | ３月　２日、関白藤原頼通ら参列して供養 |
| 康平　３年(1060) | ５月　４日、中金堂から出火、講堂・金堂・回廊・中門・僧房など中金堂院が灰燼に帰す |
| 治暦　３年(1067) | ２月 25 日、供養 |
| 嘉保　３年(1096) | ９月 25 日、東妻室僧房から出火、講堂・金堂・回廊・中門・僧房など中金堂院が悉く焼亡 |
| 康和　５年(1103) | ７月 25 日、右大臣藤原忠実ら参列して供養 |
| 治承　４年(1180) | 12 月　28 日、平重衡の南都焼打ちに遭い、寺内外の堂舎宝塔すべてが焼失。翌年再建事業が始まり回廊造営は摂津など 12 カ国に宛てられるもはかどらず。後に九条兼実が主導する。 |
| 建久　５年(1194) | ９月 22 日、供養 |
| 建治　３年(1277) | ７月 26 日、中室(東室)に落雷、講堂・金堂・回廊・中門・僧房など中金堂院すべてが焼失 |
| 正安　２年(1300) | 12 月　５日、供養 |
| 嘉暦　２年(1327) | ３月 12 日、大乗院院主の座をめぐる寺内紛争が金堂放火に発展、東金堂・塔・北円堂を除き、講堂・金堂・回廊・中門などの伽藍がことごとく焼失 |
| 応永　６年(1399) | ３月　11　日、供養(これ以前に漸次再建はすすみ、貞和３年〔1347〕中金堂の入仏供養行われる。また延文６年〔1361〕地震により金堂・南円堂が破損する) |
| 天正 11 年(1583) | ３月 30 日、風雨により金堂の金燈籠が倒れ、築地の蓋もことごとく破損する |
| 天正 13 年(1585) | ７月 11 日、秀吉、関白・藤原氏長者となり藤原に改姓<br>９月、羽柴秀長、郡山城に入城 |
| 天正 14 年(1586) | ７月 21 日、秀吉、興福寺金堂・東大寺大仏を参拝。これに先立ち春日社頭・興福寺伽藍を掃除 |
| 天正 16 年(1588) | ６月 18 日以降、興福寺の築地塀改修を行う。翌年７月８日に完成 |
| 天正 17 年(1589) | ８月 10 日、秀吉、興福寺維摩会の費用を寄進する |
| 宝永　４年(1707) | 10　月４日、宝永地震。中金堂の西回廊が倒壊し、その他の伽藍も破損（東回廊は残る） |
| 享保　２年(1717) | １月４日、講堂内陣の灯明から出火し、講堂・金堂・回廊・中門・西金堂・南大門など焼亡。以後、再建事業はすこぶる不振 |
| 文政　２年(1819) | 中金堂を仮堂として再建。回廊は再建されず今日に至る |